〔研究論文〕

縄文時代集落考　（Ⅲ）

後藤和民

Ⅲ　社会組織による段階説（承前）

(Ⅱ)　文化進化論的観点

19世紀中葉のヨーロッパを支配していた社会思想は、いわゆる"Laisser　faire"（自由放任主義）で、とくに資本主義社会における自由競争の理念が普及していた。こうした時代の影響下にあったダーヴィン（C. R. Dawin）は、マルサス（T. R. Malthus）の『人口論』（註1）を読んで、その生存競争の存在に啓発され、やがて、かの有名な『種の起源』（註2）を著わした。それが期せずして、マルクスの『経済学批判』（註3）と同じ1859年のことである。

このダーヴィンの「進化論」は、10年あまり、宗教界や神学者の弾圧や反撃を受けている間に、その豊かな実証性や当時の社会理念への適合性から、科学の各部門に多大の影響を与えていた。とくに、宗教的因習がそれほど強くなかった新開地のアメリカにおいては、これを率直に受け止める学者が比較的多かった。先にも触れたL. H. モルガンやE. S. モースなどがそのいい例である。

しかし1873年には、明らかに進化論に基づいたタイラー（E. S. Tylor）の『原始文化』（註4）が出版され、1877年には、モルガンの例の『古代社会』（註5）が発表され、それがマルクスやエンゲルスに大きな影響を与えたように、そのころにはヨーロッパにおいても、すでに進化論は広く深く浸透しており、むしろ当時における一つの知的ブームを招来していたのである。とくに人類学においては、このような進化論にもとずく文化の段階説に対して、「文化進化論説」という名が与えられている。その中でも、後世に多大の影響を与えた代表的なものとして、タイラーの『原始文化』、モルガンの『古代社会』およびチャイルドの『社会進化論』（註6）を取り上げる。

1.　タイラーの『原始文化』

タイラーは、「人類学の父」と呼ばれ、イギリスのオクスフォード大学における初代の人類学教授として有名である。文化の様相を進化の系列の中で定着しながら、文化を総体的に把握すべき必要性を説いた。とくにその代表的な著作である『原始文化』（Primitive　Culture）は、原始文化の起源と進歩に関する大作であり、その中で「生気説」（Animism）を創唱した画期的な名著である。しかも、この第1巻第1章の冒頭に、次のような言葉が掲げられている。

「文化もしくは文明とは、その広い民族誌的な意味においては、知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習その他、およそ人間が社会の成員として獲得した能力や習性のあの複合的全体である」。

これは、文化の古典的な定義としてあまりにも有名であり、タイラーの文化を有機的総体として捉えようとする志向性が的確に表明されている。

なお、この書の影響はきわめて大きく、次に述べるモルガンにも相互感化の痕跡がみられ、ドイツの民族心理学の創始者・ヴント（W. Wundt）にも、その影響がみられる。中でも、当時22才の学生であったフレーザー（J. G. Frazer）などは、この『原始文化』を読んだ感動が契機となり、法律学から人類学に転向し、ついにはぼう大な『金枝篇』（註7）などを著わし、古典的な進化論的民俗学を創立するに至ったのである。

ところで、タイラーは、「人類のさまざまな社会にある文化の状態は、人間の思想と行動との法則を研究すればわかる」といい、人類学の「二大原理」として、「文明が広範囲にわたって統合されているのは、統合された原因者の統合された行動に起因する」という原則と、「種々の段階は発達または進化として捉えられる」という原則とを挙げている。

しかも、この「合理的人類学の大きな課題、すなわち、文化現象を生んだ原因や文化現象が従う法則を研究するとき、この文化がさまざまな方向に沿って進化したという前提によって、できうるかぎり組織的に究明すべきである」というのである。ここに、明らかに合理的進化論の立場が表明されている。そして、タイラーは、文化の進化におけるおもな基準を、工芸技術の発達、科学的知識の広がり、宗教のタイプ、社会的組織や政治的組織の形態などに求めているが、その整理や体系的把握が不完全で、発展段階説としては未完成に終っている。内容的にも、その大半が宗教現象の形態的分類を中心にして、低級種族の文化と高級諸国の文化との様相を対比したにすぎない。

したがってここでは、タイラーがこの書の中で創唱し、力説しているＡｎｉｍｉｓｍ（生気説）の問題を取り上げるに止めたい。

(1) 生気説と霊魂観念

タイラーは、まず、「少しも宗教概念をもたないほど文化の低い種族が、現に存在し、あるいはかつて存在したことがあっただろうか」という。人類学者が文化を説明するとき、一般に発展段階的に捉えるからといって、無宗教状態から宗教状態へと発展したと考えられる傾向があるが、これは本質的な誤謬である。なぜならば、それは「種族が言葉も知らず、火も用いずに生存していたと主張するのと同類である。そんな種族はありえないし、事実、そんな種族は現存しない。したがって、理論では種族の無宗教がありえたとしても、現実には無宗教の種族は見出されない」という。

イ　宗教の定義

そこで、未開民族の宗教を組織的に研究するには、当然ながら、まず最初に宗教についての基本的な定義が必要となる。だが、「この定義において、最高神の信仰、死後の審判、偶像の崇拝、供犠の行事、その他さまざまの教義や儀式を求めるならば、多くの種族は確かに宗教の範疇からしりぞけられてしまう。しかしこのような狭い定義は、宗教を、その底にある深い動機よりも、特殊な発達と同視するという間違いを犯すことになる」という。これは、もっとも本質を衝いた、きわめて重要な提言であり、とくに、考古学にたづさわる者の傾聴すべき重大な警告なのである。

そこで、「最もよいことは、根源に遡って、宗教とは霊的存在者を信ずるという、最少限度の定義を下すだけである」という。そして、「われわれの熟知する未開民族には、霊的存在者への信仰があると認めねばならぬ。そんな信仰を欠く民族は、古代の民族であれ、近代の民族であれ、それは記述が多少不完全である民族」にすぎないというのである。

ロ　生気説の定義

ここでタイラーは、「霊的存在を一般に信ずることを生気説という」と規定し、「生気説は、未開人より文明人に及ぶ宗教哲学の基本である」という。そして、生気説を次の二大教義に分類した。

A　死後も連続して活動する各生物の霊魂に関する教義

B　有力な神々の階級へと向う諸霊に関する教義

すなわち、霊的存在は、人々と交渉し、人間の行動から快・不快を得、霊的存在を信ずる人間は、いつかは必ず尊敬と慰安とを抱く。このように生気説は、十分に発達すると、霊魂や来世を信じ、支配する神々やそれに従属する諸霊を信じ、これらの教義が実際には崇拝を生ずるという。

高級な国々では、道徳的要素がその宗教の重要な要素をなすが、低級民族の宗教では、そのような要素はほとんど見い出されない。といって低級民族に、道徳感も道徳基準も全くないわけではない。それは少くとも社会の世論となって伝わり、それに基づいて善悪・正邪を分つからである。高度の文化では、倫理と正気説の哲学とが強力に結合しているが、低級の文化では、この結合がまだ始まっていないらしい。そこで「わたしは今、生気説が古代に遍く行われた哲学であること、その理論が信仰であり、その実際が崇拝であることを研究しよう」という。

そこでまず、最初の課題は、人間および人間以外の霊魂について、低い文化段階の人はどう考えたかである。第一に、生体と死体との区別は何であるか。目醒め・眠り・夢・病気・死などの原因は何か。第二に、夢の中に現れる人の姿は何であるか。これら二つの現象に対して、古代の未開な哲学者は、人には生命と影像との二つがあるという明快な推測を下して第一歩を進めたであろう。この二つは身体と密接に関係して、生命は身体を

感じさせ、思わしめ、行動させる。影像は身体の像あるいは「第二我」である。また二つは、身体から離れ、生命は脱け出て、身体を無感覚あるいは死体にさせ、影像は、遠くから人々に見える、という考え方であるという。

なお、未開人の「第二我」は、生命と影像とを単に結合するだけであり、しかも生命と影像とは身体に属するから、これらは相互に所属し合って、同一の霊魂の表現である。その結果、幽霊という考え方も生ずる。そこで、未開民族の霊魂概念に相応して、霊魂を次のように定義できるという。

ハ　霊魂の定義

霊魂とは、実体のない人像であって、その性質は蒸気、薄い膜、影の一種である。これが、個人の生命と思想との原因を生ずる。身体を有する者の意識や意志が、その身体から脱け出して、ここかしこと速かに飛びまわる。捕えようもなく、目に見えないが、物質力を現わし、身体と同じ姿の幽霊となって、目醒めている人や夢中の人の前に現れる。身体が死滅した後も存続して、人々の前に現れる。他人や動物や事物の中に入って、仂くこともできる。以上の定義は、「すべてを包容していないにせよ、個々の民族に応じて多少加減すれば、概要を具える標準として十分である」という。

タイラーは、以上のような生気説と霊魂観念の設定に基づいて、各民族における具体的な形態やその実例を多数列挙している。

たとえば、「幽霊には影のように実体がないから、影という言葉が霊魂を示すようになった」実例、また、「呼吸作用は、生存中の高等動物の特徴であり、生命の出発とともに始まるから、おのずから生命と同視されている」実例など。なお、「魂が生命の機能を起すという生気説に基づく活力説は、未開人の心に、身体と心との状態に関する説明を与えるが、それによると、これらの状態は、魂が去ったためであるとか、あるいは霊が留まっているためであるとかいう。この説は、未開人の生物学において、広くて深い地位を占めている」という。そして、このように「魂が一時脱け出すことは、広くどこででも魔法使や祭司や予言者の務めであり、彼らは、己が霊を遠方へ旅させるとか、己が魂をその身体という牢獄から解放すると信じている」という。

さらに、「死は、心理学の問題において最も深刻に考えられる事柄である。肉体から離れた魂が、死に際して身体から脱け出ることと特別に関係があると、いかなる時代にも考えられていた。これは、単に幽霊説だけでなく、ことに死の前後の生霊・死霊という考え方と関係している」という。なお、人が死んだとき、「人身御供を葬儀に供えて、死者の用に立てるという考え方は、世界各地に広く行われ、生気説の宗教における行事となっている。地位の高い者が死んで、その魂が遊行するや、従者・奴隷・妻たちが葬儀に殉死し、主人の魂と一緒に同じ旅行を続け、来世においても奉仕するわけである。これは最も未開な段階のみに止まらず、文化の程度が進んだ民族の間ですら、行われている」という。

また、「葬式の時、人と動物とを供犠するわけは、それらの魂を死者へ遣わして、仕えさせるのと同じく、無生物にも魂があると信ずる種族が、これを供えて、その魂へと運ばせるのは、すこぶる理論に合っている」という。

(2)　動物崇拝

タイラーによると、動物崇拝には次の三種類があるという。

A　動物そのものを崇拝するもの
B　動物には神が宿るから崇拝するもの
C　動物をトーテムあるいは種族祖先の代表として崇拝するもの

最初に、文化の低かった人は、動物を動物として崇拝し、自分以上の力・勇気・奸智があるとみなし、動物は人と同じく魂があって生き、その魂は肉体が亡んだ後も存続し、善もなせば悪もなす力があると考えた。この考え方は、動物には神が宿り、遠方から見たり聞いたり行動することができ、その肉体に神霊が憑くから、肉体が亡んだ後も、その力は継続するという思想と混合している。

古代エジプトは、猫・豺(やまいぬ)・鷹を神聖視し、そのミイラが現存している。エジプトの動物崇拝は、ピラミッド時代よりも遙かに上代におこなわれた未開な祖先の痕跡を示すという。神々が特殊な聖獣を守護し、その身体に化し、あるいは神々が動物をして代表せしめるという考え方は、エジプトにおいて最も顕著である。近代世界に入って、動物崇拝が盛んに残存する文明国は、バラモン教の

領域であって、聖獣、動物に化身した神、動物の形を象徴とする神が明らかに現存する。

これらの動物崇拝のうち、蛇崇拝は特に注目すべきであるという。アメリカ・インディアンは、響尾蛇を蛇の祖先や王として崇拝し、順風を吹かせ、暴風をも起しうる聖なる保護者であるという。蛇信仰は、古代ヨーロッパにもその痕跡が認められ、ローマの地神は蛇の形をし、古代プロシア人は家に住む蛇に供養した。この蛇信仰は、南アジアの土着民の間に、とくに著しいという。初代のインド仏教でも蛇崇拝は重んじられ、五頭一尾の蛇の彫刻があり、インドの蛇崇拝はトーテム崇拝と関係があった。

さらに、蛇は高級な神々の化身あるいは象徴として、世界各地の諸宗教において、著しい地位を占めているという。未開民族は、蛇について神話的に考えを凝らしているうちに、ついに蛇をもって悪魔の人格化とするに至った。この悪魔に化した蛇は、ゾロアスター教徒の信ずる悪蛇「アジ・ダハカ」に属し、セム系統の「エデンの園」の蛇と明らかに関係し、両者の間に歴史上の連結があった可能性を物語っているという。

二　トーテム崇拝　（Totemism）

聖なる祖霊が、動物に化身して崇拝される例は、死霊崇拝と祖先崇拝との間の連結を形成している。この連結は、低級民族の宗教の他の部門では、特別の動物をある家族や種族や民族が崇拝することに現われている。多くの種族は、ある事物・植物ことに動物と連結し、その名をこれより引き、神話上の系図をすら由緒あるものにしているという。たとえば、アルゴンクイン・インディアンには、熊・狼・亀・鹿・兎などの動物を種族名とするものがあり、熊を種族名とする種族の場合、彼らは熊として話をし、熊をその種族の表標として描く。このような仕方で種族を分けることを「トーテム崇拝」（Totemism）という。

もちろん、「トーテム崇拝の起源は、神話の領域から生じたが、社会の区分、結婚の制度その他が、トーテム崇拝と結びつき、ある文化の段階において、人類の法律や風習の重要な部分をなしていた。種族動物が宗教行事の題目であり、守護神として遇されるかぎり、トーテム崇拝は宗教の領域に入ってくる」という。

以上のように、タイラーが創唱したAnimism（生気説）は、ラテン語のanimaからきており、英語のanimal（動物）やanimation（活気）などの語源と同じく、生気の意である。この生気説によると、すべての生物も無生物でさえも、人間と同じく生気をもって生きている。そのため、原始未開民族は自然物を崇拝し、自然物の生気は人間の生気と同じく、一時あるいは永久に、その物体から遊離して存在すると考える。だから、生気は精霊であり、やがて霊魂あるいは神の観念にまで発達するというのである。

タイラーは、この生気観念は、未開種族の夢・病気・影・失神・死などの観察から始まると推測し、生活原理としての霊魂の存在に着目し、さらに人間の霊魂から類推して、自然現象や活動するさまざまな事物にも霊魂が宿ると考え、それがやがて人格性のある神とみなすに至ったという。こうした考え方は、未開民族の神話が描く自然観、子供の自然物の見方や器物の扱い方にも現れる。そればかりか、現代の高級文化の民族の文学・風習・信仰などの根底にもひそんでいる。したがって、宗教信仰の発生する根源は、まさに原始民族の生気説にあるというのである。

なお、このタイラーの後に、宗教起源説として、イギリスのマレット（R. R. Marrett）の前生気説（Pre-animism）や、コドリントン（R. H. Codrington）のマナ説（Mana-ism）が現われた。すなわち、マレットによれば、現存する未開種族の間には、生気説のように、一つの人格的存在としての霊魂という観念の伴わない宗教儀礼があり、その崇拝対象は、人格性のない一種の活力あるいは生命として見なされ、すべては単に生きているものとしてのみ取り扱うという。このようなanima以前の非人格的活力というものは、人や物に固有の生命力としてみなされるが、これが特殊の神秘的呪力として宗教の起源でもあるという説は、物力説（Dynamism）とも呼ばれる。この原始民族の根本観念として、現存する未開種族における非人格的な神秘な呪力に注目し、この観念によって宗教や呪術の根源を探ろうとする説を、コドリントンはメラネシアの土俗語mana（勢力ある）からとって、マナ説（Manaism）と創唱したのである。

2. モルガンの「家族的諸制度」

モルガン（L. H. Morgan）は、『古代社会』（註5）の中で、人類発達の主要な段階を捉えるに当って、二つの独立した系統の研究があるとし、先に挙げた「発明・発見」に基づく生産形態の段階説のほかに、「本源的制度を通じて導く」方法を挙げ、その「例証として挙ぐべきものは主として家族的諸制度からとることにしよう」という。その「本源的制度」として、政治形態、言語、家族、宗教、家屋および建築、財産などを挙げているが、ここでは、モルガンのいう「家族観念」と「政治形態観念」の発達を中心にして、その社会組織の段階的把握を概観してみたい。

(1) 家族観念の発達

モルガンは、一時代における家族形態は、他の時代の家族形態とは、応々にして全然異るとし、「その発達の諸段階は、血族および姻族の制度ならびに結婚に関する習慣の中に体現されており、これらによって、家族は、綜括して、数々の継次的諸形態を通して明白にたどりえられる」として、まず、次のA～Eの5つの家族形態を提示した。

A 血縁家族（Consanguine Family）

これは、一集団内における直系および傍系の兄弟姉妹の通婚を基礎とする。この証拠は、現存の血族制度の最古のものとして、マレイ制度の中にいまなお残存する。この家族の最初の形態は、それがつくり出した血族制度と同じく、古代にあっては普遍的であったことを示す傾向にある。しかも、「何らかの概念的形式で把握しうる組織の中で、これ以上に基本的なものはない」という。

この血縁関係には、性の区別がなく、すべての血族は遠近を問わず、この親族関係のもとに包括されるが、それには認識しうる根本的な関係として、次のような5つの階梯にまとめられる。

第1階梯……私自身、私の兄弟姉妹、イトコ、マタイトコおよび遠縁の男女のイトコがこれに属し、これらすべては無差別に私の兄弟姉妹である。

第2階梯……私の父母、その兄弟姉妹（オジ・オバ）、父母のイトコ、マタイトコおよび遠縁のイトコがこれに属し、これらすべてが無差別に私の父母である。

第3階梯……父方および母方における私の祖父母は、その兄弟姉妹およびその種々のイトコとともに、そのすべての者は私の祖父母である。

第4階梯……私の息子や娘が、その種々のイトコとともに、すべて無差別に私の子供である。

第5階梯……私の孫息子と孫娘は、その種々のイトコとともに、すべて同様に私の孫である。

以上の各階梯において、同一階梯に属する個人は、すべて相互に兄弟姉妹である。各人は、自分自身と同一範疇に属するすべての他の人に対して、同一の親族用語を使用する。この形態は、モルガンのいう「野蛮時代」に属するという。

B プナルア家族（Punaluan Family）

この名称は、ハワイ人のプナルア家族関係に由来する。これは、一集団内の数人の兄弟たちと相互の妻たち、および一集団内の姉妹たちと相互の夫らとの通婚を基礎とする。しかも、その兄弟姉妹は、イトコおよび更に遠い男女のイトコを含み、彼等すべてが相互に兄弟姉妹と考えられていた。

プナルア家族は、血縁家族に続いて発生したが、それに付随し、またそれが改変されたもの。この推移は、実の兄弟姉妹を結婚関係から次第に排除することによってもたらされた。すなわち、兄弟たちは自分の実の姉妹と結婚しなくなり、そして氏族組織が社会に完全に普及した後は、彼らの傍系の姉妹とも結婚しなくなった。しかしその間、彼らは他の残りの妻を共有していた。姉妹たちの場合も同様である。この血縁家族からプナルア家族への発達は、除々に対偶家族に導き、結局は、一夫一婦制の氏族組織へ止揚する発端となった。

C 対偶婚家族（Syndyasmian Family）

これは、結婚の形式では、一人の男子と一人の女子との配偶に基礎をおくが、しかし排他的な同棲を伴ったものではない。だが一夫一婦制の萌芽といえる。離婚あるいは別居は、夫および妻双方の任意である。この家族は独得な形態で、その数個の家族は、一般には、共同の世帯を構成する一棟の家屋に見出され、そこでは「生活上の共産主義の原則が実行されていた」という。この事実は、「この家族が単独で生活上の困難に直面するにはあまりに微弱な組織であったことを認めるもの」だという。この家族は先行家族のように、その存在を証すべき独特な血族組織を全くもたなかったが、それ自体は地上の大部分にわたって存在した。

D　家父長制家族（ Patriarchal Family ）

これは一人の男子と数人の妻との結婚を基礎とする。これはヘブライの牧畜部落の特殊家族を定義するために、限定された意味で用いた。ただそこでは、酋長などが一夫多妻を行っているが、それは普遍性を欠くため、一般には影響はなかった。セム部族の家父長制家族は、土地を所有し、羊や牛を飼育するために、奴隷および自由人を包含する多数の人々を、家長権のもとに一家族に組織することが、本質的特徴であった。この家父長制においては、その成員ならびにその財産に対する権力が重要な要素である。この家族に、本来的制度の属性を与えたのは、一夫多妻制よりもむしろ、かつてなかった隷属的・従属的集団の存在である。

血縁家族やプナルア家族においては、家父長の権威は不可能であり、また認められてもいない。対偶婚家族のもとで、それは微弱な勢力として現れはじめた。しかしその発達は、家族がますます個別化されるに従って着々と進み、そして、子供の父性を確保する一夫一婦制のもとに、家父長権は完全に確立されたのである。

E　一夫一婦制家族（ Monogamian Family ）

これは、一人の男子と一人の女子との結婚を基礎とし、排他的な同棲を伴っている。そしてこの排他的同棲が制度の本質的要素をかたちづくっている。「これは正しく文明社会の家族であり、したがって本質的に近代的であった」という。この家族形態はまた独立な血縁組織をつくった。

以上のような家族形態の相関的な順序については、モルガンは、各形態が一定の社会状態において完全な形で発生し、同一の発展段階にある部族では普遍的かつ排他的に盛行し、そして順次、高級な形態へと進みつつ消滅するという意味で、この諸形態を提示したのではない。「これらの数形態を通しての人類進歩における斉一性には偏差がある」が、その一般的傾向として次のことがいえるという。

「血縁家族およびプナルア家族は野蛮時代の状態に（前者はその最低状態に、後者はその最高状態に）属したが、プナルア家族は未開時代の下層状態まで継続したこと、そしてまた一夫一婦制家族は未開時代の上層状態に属し、文明時代まで継続したのである」と。

(2)　政治形態観念の発達

モルガンによばれ、政治のすべての形態は、まず「人および純粋に人的な関係に基礎　置くもので、所謂社会（ societas ）として識別されうる」ものと、次いで「地域と財産とに基礎を置くもので、所謂国家（ civitas）として識別されうる」ものとの、本質的に異なる二つの概括的な型（ Plan ）に還元されるという。

社会型政治形態では、氏族（ gens ）がこの組織の単位である。古代においては、統合の継次的段階として、氏族、胞族（ Phratry ）、部族（ tribe）および部族の連合体（ confederacy）が生じている。そしてその連合体が民族あるいは国民（ populus ）を構成した。やや後期において、同一地域における部族の合一は民族を形成し、独占的地域を占領する部族の連合体にとって代った。このようなのが、氏族の出現後長期にわたる古代社会の実際における普遍的な組織であった。そしてそれは続いて文明が発生した後もギリシャ人やローマ人の中に残っていた。

国家型政治形態では、境界によって限定された市邑または市区が、その保持する財産とともに、この組織の基礎あるいは単位である。その結果である政治的社会は、領土的地域の上に組織され、地域的関係を通じて財産ならびに人と関連する。その統合の継次的段階は、組織の単位である市邑または市区、その集合である郡または州、さらにその集合である国家的領域または領土であって、それらの地域の住民は政治的団体に組織されている。

しかし、古代社会においては、この地域的型、国家的型は知られていなかった。したがって、ここではおもに前者の社会的型を中心にして、その社会組織を概観してみたい。なお、モルガンは、これらの諸形態について、アメリカ・インディアンのイロクォイにおける氏族・胞族・部族・連合体と、ガノワニアにおける氏族、アズテック連合体、ギリシアにおける氏族・胞族・部族・民族、ローマにおける氏族・キュリア・部族・人民などを比較対照しつつ、きわめて詳細に具体的に例示している。しかし、ここではとくに、モルガンの献身的フィールドであったイロクォイを中心として、その形態の特色を概観しておきたい。

A　性を基礎とする社会組織

モルガンは、血縁を基礎とする氏族組織よりもさらに古い原始的な組織として、この「性を基礎とする社会組織」を仮設した。それは、「氏族の萌芽的原理を包含しているように思われる」とし、この推論が実証されれば、「現在オーストラリア原住民の間に完全に力強く存在しているこの男女の階級組織は、本源的な氏族組織と同じく、古代において人類の部族にひろく行われていたことを示すであろう」という。そして、以下のような推論を展開している。

野蛮の下層においては、夫婦の共同態が社会制度の中心原理であったろう。集団内に確立された婚姻の権利と特権（ jura conjugalia ）は巨大な組織に発展し、それが社会を構成する組織原理となった。これらの権利と特権は、性質上当然ながら深く根をおろしていたので、それからの解放は無意識の改革によって徐々に完成された。
したがって家族は、この婚姻制度の範囲が漸次に縮小するにつれて低い形態から高い形態へと進歩したことが見出されるであろう。

すなわち、家族は一集団内の兄弟姉妹の通婚に基づいた血縁家族に始まり、オーストラリア人の階級に近い社会制度の下に、第二の形態たるプナルア家族に推移した。そして、これは妻を共有にする兄弟の集団と夫を共有する姉妹たちの集団を代置することによって、最初の種類の婚姻を破壊した。性に基づく階級組織およびその後に生じた血縁に基づくより高度の氏族組織は、自然陶汰によって無意識にもたらされた大きな社会的変動の結果とみなすべきである。

B　氏族組織

氏族組織こそは人類の最古にしてもっとも普遍的な制度の一つである。それは野蛮状態に発し未開状態の三小期を通じて継続し、政治的社会が樹立されるまで存続した。しかもこの氏族社会は、それが見出されるところではどこでも、その構成的組織および作用の原理は同一であり、ただ民族の進歩に伴って低度の形態から高度の形態に変化しているにすぎない。これらの変化は、同一の原始的観念の発達の歴史を与えるものである。

氏族とは、ラテン語のｇｅｎｓ、ギリシャ語のｇｅｎｏｓ、サンスクリット語のｇａｎａｓと同じように、本来の意味は血族（ｋｉｎ）である（註８）。

それらの言葉は、同じ言語のうちのｇｉｇｎｏ、ｇｉｇｎｏｍａｉおよびｇａｎａｍａｉと同じ要素を含み、「生むこと」を意味し、それぞれの言葉には、一氏族内成員の直接共通した子孫であることが内含されている。だから、氏族は同一の共通の祖先から由来した血族の一体であり、氏族名によって区別され、血縁によって結合されているのである。

しかし、氏族は、このような子孫の半分のみを包含するのであって、次の二つの場合がある。すなわち、(a)、出自が女系である場合；それが原始時代においては一般的で、氏族は一人の仮想の女性の祖先とその子供および女子を通じて永続するその女系の子孫から構成される。(b)、出自が男系である場合；集団的財産の出現後に氏族は男系に変化する。氏族は一人の仮想の男性の祖先とその子孫および男子を通じて永続する男系の子孫によって構成される。

このように、氏族はその古代の形態から最後の形態にいたる推移において、人類の進歩とともに、継続的な発展の段階を経過した。その根本的な変化は次の二つに限られ、第一には、古代の法則であった女系から、ギリシヤおよびローマの氏族におけるごとくその出自が変化したこと。第二には氏族の死亡した者の財産が、古代に行われたその同氏族員への相続から、最初は死者の男系の親族へ、そして最後には彼の子への相続に変化したことである。「この変化は、些細なものに見えるかもしれないが、重大なる状態の変化とともに大なる前進的発展を示すものである」という。

なお、氏族内の通姻は禁止されていた。それは氏族の成員を血族結婚の幣害から遠ざけ、種族の活力を増加させた。氏族は、血族の紐帯、女系の出自を通じての純粋な血統、および氏族内の婚姻禁止という三つの基本概念に基づいて生じたものである。氏族の観念が発達した時には、氏族は当然一対の氏族の形態をとったであろう。なぜならば、男性の子供らは除外され、子孫の二階級を組織する。すなわち、一氏族の男性および女性は他氏族の女性や男性と結婚し、子供らはそれぞれの母方の氏族に所属したからである。この血族という原則的な結合紐帯を基礎とする氏族は、その各成員に対しては、個人的保護を提供する以外、何らの現実的な力も与ええなかったのである。

C　胞族組織

胞族（ｐｈｒａｔｒｙ）とは、その言葉が示す通り同胞関係（ｂｒｏｔｈｅｒ－ｈｏｏｄ）であり、氏族組織から自然に発達したもの。それは同一部族の二氏族あるいはそれ以上の氏族が、共通の目的のために有機的に結合したもの、あるいは結社体である。これらの氏族は、一般に、本来の氏族の分裂によって形成されたようなものであったという。

phratry とは、ギリシア語のｐｈｒａｔｒｉａから由来し、英語のｂｒａｔｈｅｒと語源を一にする。ギリシアにおける部族の間では、胞族組織は、氏族とほぼ同様に恒常的で、きわめて顕著な制度となった。一部族内のすべての氏族は、概して共通の出自であり、共通の部族名を有した。したがって、各胞族に特定数の氏族を結合し、そして各部族に特定数の胞族を形成するために、厳格な強制を必要としなかった。しかし胞族組織は、本来の氏族の再分化としての特定な氏族の直接的親縁関係のうちに自然的基礎を有していた。この本来的氏族こそ、疑いもなく、ギリシヤの胞族が最初に形成される基礎であった。

ローマのキュリア（Ｃｕｒｉａ）は、ギリシリアの胞族に類似する。各キュリアには１０氏族があり、ローマの３部族の各々には10キュリアがあった。このキュリアの機能はギリシアの胞族のそれより遙かによく知られており、すでに直接政府の機能をもち始めていた点から、より程度の高いものであった。氏族集会（ｃｏｍｉｔａｃｕｒａｔａ）は、各自一票の集団的投票権をもつキュリアによって議決した。

アメリカ原住民の大多数の部族にも、胞族が存在した。そこでも、ギリシヤおよびラテン部族におけるごとく、自然的発展によって発生し、しかも氏族から有機的に連続する第２の構成要素として存在するように見られる。しかし、それは、氏族、部族および連合体がもっていたような本来的な政治的機能は伴わない。ただ、氏族よりは大きく、部族よりは小さなある組織のための必要から、とくに部族が大きかったときは、社会制度における特定の有用な権能を賦与されていた。本質的特徴においても、また性格においても同一制度として、それは、その古代的形態における組織とその古代的機能を伴う組織を提示するものである。

D　部族組織

インディアン部族は、その確定的な構成要素を把握するのはむづかしいが、はっきりとその特徴を示しており、アメリカ原住民の大きな集団の究極的組織である。彼らが自然の分裂過程によって到達した多数の独立部族は、彼らの境遇の顕著な特徴を示す。各部族は、それぞれの名称や方言や最高の政治組織、それに各部族が占拠しかつ自分自身のものとして防衛した土地の所有によって、それぞれの個性を有した。

部族の数は方言の数と同じく多数であった。それは部族の分離は方言の変化が始まるまでは完成されなかったからである。だからインディアン部族は、同一種族が占拠している地域における分離を通じて自然に発展した結果であり、言語の相違分裂および独立がこれに伴ったのである。方言および領域の独占的所有は、各部族内の人数が少ないのにもかかわらず、多くのインディアン部族に民族（ｎａｔｉｏｎ）の言葉を適用するに至らしめた。

しかしながら、部族と民族とは厳密に等しいのではない。民族は、氏族制度の下においては、同一政治組織の下に結合した諸部族が、合同して一つの国民を構成するまでは発生しない。連合体は個々別々の領域における独立した諸部族を要求するのであるが、しかし合同は、氏族または部族による地域的分離の傾向が継続しようとも、同一地域におけるより高度の過程によって諸部族を結合するのである。

インディアン部族は、二氏族あるいはそれ以上の氏族から発達した数氏族から構成されており、その成員のすべては結婚によって混和し、それらの人々のすべては同一の方言を用いている。アメリカ原住民の間では、部族が、異った方言を用いる人らを包容した実例はきわめて稀である。原住民の大きな集団が独立の諸部族の中に見出された事実は、氏族制度の下における政治形態の観念が緩慢でありかつ困難であることを説明する。諸部族が合同して一民族を形成することは、アメリカにおいては、いかなる場所にもいかなる場合にも生じなかったという。この点、ギリシヤにおけるアテネの４部族、ローマにおけるラテンおよびサビンの３部族が合同したのとは、本質的にその性格を異にしている。

E　連合体組織

相互の防衛のために連合しようとする傾向は、血族関係を有しつつ隣接する部族の間には、きわめて自然に存在する。結合の利益が実際の経験によって十分認識されたとき、当初は連盟であった組織が、漸次に連合的統一体に凝集した。彼らが体験してきた不断の戦争状態は、このような連合の利益をますます認識させたし、また生活技術が十分進歩した部族の間では、必然的傾向としてその実現を促進させた。それは、氏族を部族に結合させた原理を拡大したところの、低度の組織から高度の組織への単なる発展にほかならない。

連合体が発生する条件やそれが形成される原理は、驚くほど単純で、それは時の経つにつれて、すでに内在する要素から自然に成長した。一部族が数個に分れ、その再分された各部族は独立しているが、隣接する地域を占有しているところでは、彼らの有する共通の氏族と関連のある方言を基礎として、連合体が、彼らをより高度の組織に再統合した。それゆえに、連合体は氏族をその基礎ないし中心とし、語系をその周辺として有する。共通の言語の方言の限界をこえて拡がった連合体は、一つとして発見されていない。また、氏族および部族の成員であることと、言語を共通にすることを除外して、平等な条件で連合体に結合しうる方法はありえなかったという。

未開の下層状態や中層状態、あるいはその上層状態において、世界のいかなる地域においても、氏族制度の下にあって、自然的発展によって王国が発生することは不可能であった。そもそも君主政（monarchy）は、氏族感情（gentilism）と両立しえない。それは文明の後期に属する。専制政（despotism）は、未開の上層状態におけるギリシヤの部族間に若干の事例を見る。しかし、それは簒奪の上に基礎づけられており、民衆によって不正視され、また事実上、氏族的社会の理念とは性質を異にしているというのである。

以上のように、家族概念と政治概念との発達過程を形態別にみてきたが、両方の概念や形態は元来有機的に関連し密接に結合しているはずである。これについてモルガンは、第6章に「家族と関係を有する諸制度の順列」として、次のようにまとめている。

(3)　諸制度の発展順列

「この順列は、血縁家族から一夫一婦制家族までの家族の発達に影響を及ぼした主要な社会上および家族上の諸制度を体現している。それらは、実質的には、以下に挙げる順序で人類の数個の民族に発生したものとして、また一般的には、それに対応する事態にある諸民族に存在したものとして、理解されるべきである」という。

A、順列の第一段階

Ⅰ　乱婚関係……想像しうるかぎりの野蛮時代の最低段階。人類はまだ周囲の動物とほとんど区別できない。現存の未開人にこの段階は見出せないが、血縁家族とマレイ式血族組織は先行的乱婚を前提とするといえる。

Ⅱ　一集団内における直系および傍系の兄弟姉妹の通婚。その結果として血縁家族およびマレイ式血族組織を生ぜしめる。

Ⅲ　血縁家族（家族の第1段階）

Ⅳ　血族および姻族のマレイ式組織

B、順列の第二段階

Ⅴ　性を基礎とする組織、および兄弟姉妹の通婚を阻止するに寄与したプナルア慣習。

Ⅵ　プナルア家族（家族の第2段階）
おそらく野蛮時代の中層状態にはじまった。

Ⅶ　氏族組織……プナルア家族の後に、しかもそれに基づいて現れた。野蛮時代の中層状態に属する。

Ⅷ　血族および姻族のテユーラニア式およびガノワニア式組織

C、順列の第三段階

Ⅸ　人類のある部分を未開時代の下層状態に発展させた氏族組織の影響の増大および生活技術の改善

Ⅹ　排他的同棲を伴わない一対の男女間の結婚

Ⅺ　対偶婚家族（家族の第3段階）

D、順列の第四段階

Ⅻ　局限された地域における平原上の遊牧生活。

XIII　家父長制家族（家族の第4段階－例外的）

E、順列の第五段階

XIV　財産の発生および不動産直系相続の設定

XV　一夫一婦制家族（家族の第5段階）

XVI　血族および姻族のアリアン、セム、ウラル式組織、テューラニア式組織の破滅。

このモルガンによる全人類の一線的進化論にもとづく普遍的発展段階説は、マルクス＝エンゲルスの大いに歓迎するところとなり、とくにマルクスの『資本主義制生産に先行する諸形態』（註９）において欠落していた、農業生産以前の段階を補うものとして、『家族・私有財産・国家の起源』（註10）の中に全面的に取り入れられている。しかし、マルクス自身においては、モルガンの『古代社会』を読みながら、その抄録と多少の批評をノートしておいただけで、未消化・未整理のままであった。それをエンゲルスが、マルクスの「遺言を執行する」として、多少の新しい研究成果や所論を加えて、そのまま出版したのである。

ところが、これがいつしかマルクス主義史学の根本原理と一体となって、「年代または時代ではなく、地理また環境また風土でなく、そして種族また民族ではなくて、実に発展段階の原則のみが、われわれの世界史学の理論的形成に用いられるべき最も重要な、いな唯一の必然なる原則である」（註11）とまで云われるに至ったのである。これは、ソ連の歴史学者をはじめ、全世界のマルクス主義を信奉する経済学者や歴史学者たちが、ほとんど例外なく、この原則に基づいて歴史を解明しようと試みたことは、「その後の人文科学の著しい現象であった」（註12）という。

しかし、世界史の客観的事実そのものは、モルガンの示すような一線的、普遍的な発展段階を実証するとは限らず、むしろ否定的な現象の方が多い。だから、ソ連の考古学者などのうちから、この点に比較的早く気付いた者が出ている。それは、「彼らが遺跡の層位学的、遺物の形式学的研究などから、文化の伝播や受容、民族の移動や接触などの歴史的、外的要因の大きな作用を考慮に入れなければ、到底文化の内的発展の原理だけでは、客観的事実の説明は不可能であるという経験を重ねた結果に他なるまい」（註12）という。

20世紀に入ると、一般に、モルガンの文化進化論に対して、批判的・否定的態度をとる者が多く、とくに、人類学や民族学の現存未開文化の研究に基づく史的復原は、あくまでも抽象的・観念的なもので、歴史学や考古学の求める客観的な歴史とは異質なもので、『古代社会』のごときは人類の歴史とは認め難いという非難が顕著となった。

3. チャイルドの『社会進化論』

モルガンの単系の一線的文化進化論の構想は、第２次世界大戦後になって、チャイルドの普遍的文化進化論を生み出す結果となった。

チャイルドは、生物学的進化を「有機的進化」、文化的進化を「社会的進化」と呼んで区別したが、ダーヴィンの進化論における変化、遺伝、適応、淘汰の原理は、そのまま社会的進化にも転用できるし、モルガンが全世界に普遍的に適用しうると考えた発展段階説は、「彼らの社会の関係から孤立した個々の組織の進化についてではなく、社会を一つの全体として把えた上での進化についてであった」とみて、これも人類文化に適用できるとしている。そして、それが、1951年に彼の『社会進化論』（Social Evolution）（註６）となって公刊されるに至ったのである。

ここでチャイルドは、先に「Ⅱ、生産形態に基づく段階説」の項で述べたように、モルガンの提示した「野蛮」、「未開」および「文明」の三段階の設定を認め、「分類の仮りの基本としてモルガンの術語を使用」した。しかも、マルクスのいう「生産様式」としてではなく、「生産力」の革命的発展をメルクマールとして、三段階説を提示した。したがって、その普遍的文化進化論の枠として、この「術語」を借用しながら、その発展段階の内容そのものは実質的に全く別個のものであった。それは社会組織においても同様である。

たとえば、チャイルドの記述の中から、その要素を抽出して無理やり、前氏族社会 → 氏族社会 → 階級社会というような図式を組み立てることができるかも知れないが、彼は決してそのような図式を採用しなかった。それは、「氏族とか階級とかいう社会的制度は、考古学によってその実体を把握することが困難で、従ってそれらを規準として人類の発展段階を構成することに不安を感じたためであろう」（註12）。たとえば、チャイルドは、第５章の「考古学的資料の社会学的解釈」において、次のような具体例を挙げている。

まず、地域集団の大きさは、同じ場所に住んだとみられる家族の数を単に意味している。その領土の範囲は、はっきりとは推察できない。定住地が継続して占有され、テル（Tell）（註13）を形づくったとき、そのテルとテルとの間の半分の

距離がそれぞれの領土を現わしたであろう。しかしヨーロッパでは、文化の変貌とその考古学的時期の把握によっては、2つの隣接する集落は同時に存在していたと判定することはできない。なぜならば、一つの集落は、他の集落の居住者が10年ほど前に住んでいた場所であった可能性もあるからである。

また、いかなる住居や埋葬の状態から類推するにしても、首長職に対する考古学的資料は、酋長という言葉から受ける権威の性格やその由来についてはいかなる糸口も示さない。そこで推察しうる範囲は、せいぜい例外的な権利とか、比較的多くの富を独占している者の存在ぐらいである。とすれば、考古学上の記録では、貴族を認定することは更に困難であり、奴隷の存在などは捉えようがない。

さらに、労働の専門化による区別については、民族学的記録では、武器や網や土器づくりやその他の技術に巧みな専門家は、みな最低以下の経済的水準にあったと報告されている。しかし一般的にいって、これらの者は一時的専従者にすぎない。彼らは元来狩人であり、漁師であり、百姓である他に、自分たちの熟練した技術を用いる。だから一時的専門家は考古学的記録上では認められなかったし、またそのような階層的な分類はあまり重要ではなかったろう。完全な専門家ならば、みずからは食糧の生産はせず、自分の熟練した技術による生産物の見返えりとして、その社会の余剰物資で養われていたであろうが、そのような専門家の存在を考古学で実証するのは容易なことではないのである。

そして親と子の自然家族についても、考古学者とておそらく異存のない生物学的必然である。しかし、その家族を一種の制度、共同の単位、すなわち富や地位の移譲に伴なう財産相続などの問題とすると全く違ってくる。しかもそれは驚ろくほど複雑な様相を呈している場合が多い。とりわけ、「われわれをして考古学的に、父系制度と母系制度とを区別しうるような現象的手がかりはない」という。どんな場合でも考古学者は、母系制の仮定的特権を認めることは望めなかったが、女性をかたどる小型の人物土偶が、それを物語るものとして受け取られてきた。しかし、それが女神崇拝や女の生殖能力に対する認識に基づいたものである以上、ギリシヤやローマのヴィーナスのみならず、現代のマリア像までが新石器時代の土偶に結びついてしまう。だから、「女性土偶であること自体が、明かに父系社会に属するヴィーナスやマリア像と対比して、母系制に属することの積極的な根拠となりうるであろうか」と反問している。

このように、チャイルドの『社会進化論』は、モルガンの『古代社会』に対して慎重であるが、あまりに実証主義に徹して、推論を避けすぎたきらいがある。「これは彼が普遍的文化進化論というような本来実証主義だけでは到底取り扱えない大問題と取り組みながら、実証主義に終始した矛盾による失敗と見なされよう」といい、このチャイルドとモルガンのきわめて対照的な点を挙げると、次のことがいえるという（註12）。

㈠　モルガンが人類はすべてどこででも同一の進歩の段階を踏むという、一線的単系の文化進化論を唱えたのに対して、チャイルドは、発掘による現実的様相は世界各地、民族・部族によって一様ではない。ただ人類を全体としてみるときのみ、そこに、野蛮→未開→文明という普遍的な社会的進化を認めうるとしている。

㈡　その研究の方法論として、モルガンは人類学や民族学に重点を置き、現存未開人の状態から古代の状態を復原しようとするのに対し、チャイルドは考古学的に実証されないかぎり、モルガンの進化系列は理論で、歴史的実在ではないとする。

㈢　モルガンは極めて積極的に大規模で非常に具体的な発展段階や時代区分を設定したが、チャイルドは何人にも異論の余地のない、ごく常識的な三段階を示したほかは、なんら具体的な図式も描かず、至って消極的な態度をとっている。

同じ文化進化論に立っていても、演繹的観念論と帰納的現象論とではこのように違ってくるのであって、文化の発展段階を具体的な歴史現象に即して捉えようとするとき、各地域・各民族における特殊性・個別性というものが問題となってくるのは、むしろ当然のことであろう。そこで、日本における原始社会の発展段階を捉えるために、「モルガン＝エンゲルスの段階区分に、日本の特殊性を考慮して、若干の修正と整理を加え」た、「一案」（註14）などが出現するわけである。ここでは、ごく最近の研究成果として、石母田正の「修正案」について、ごく簡単に触れておきたい。

4. 石母田正の「修正案」

(1) 野蛮（ savagery ） の段階

野蛮の前期（ ＝無土器文化、旧石器文化 ）

まだ土器と磨石器をもたず、食糧獲得の主要形態は狩猟と漁撈。各種の打製石器は加工技術の発展段階や道具の分化を示す。末期の手槍・投槍は狩猟経済に一時期を画したろう。彼らは恐らく、日本列島が大陸から分離する以前に、日本に渡来した前期旧石器時代人の後裔であろう。

野蛮の後期（ ＝縄文時代 ）

採集経済という基本的特徴によって、まだ野蛮段階に属するが、ここに画期的な発展をみる。

a） 骨角器にみる漁撈経済の進歩と安定。

b） 弓矢の出現による狩猟の本格的労働への発展。

c） 土器製作による食糧の拡大と計画的生活保証。

d） 磨製石器の出現による用途の拡大、材木の伐採、簡単な住居建築と定住生活の可能性など。

e） 植物質の衣類、家犬の飼育、丸木舟と櫂など。

この時期は、その自然条件と採集経済の制約下では最高の生産力を発展させたが、その社会組織は、抜歯の風習（ 成年式儀礼 ）にみられる強い共同体、呪術的な女性土偶が示す母の権威、石棒を統率者の象徴とした首長などから、呪術の支配する血縁氏族＝クラン共同体の段階に比定される。

(2) 未開（ babarism ）の段階

水稲を栽培する農業社会である点で、採集経済の野蛮段階と根本的に区別される。

未開の前期（ ＝弥生時代 ）（ 以下略す ）

未開の後期（ 古墳時代前期 ）（ 以下略す ）

(3) 文明（ civilization ）の段階

文字の使用によって特徴づけられ、西暦５世紀には確実な証拠があるから、およそ倭五王の時代・古墳時代中期以後の時代に当る。（ 以下略す ）

この段階的把握は、日本における具体的な歴史現象に基づいて、モルガン＝エンゲルスの観点そのものを局部的に修正したものではない。あくまでもモルガン＝エンゲルスの観念的設定を絶対的前提として、具体的な事実のうちそれに適合する現象のみを抽出し、土偶や石棒などの意義をそれに都合よく解釈してむりやり図式に当てはめようとする。こうした牽強付会の試案は数多いが、いずれも主客顛倒の誤謬として取るに足らない。

こうしたモルガン＝エンゲルスの一線的文化進化論に基づく発展段階説が、実際の考古学的現象と一致しないのは、それは地域や民族の相異におけるバラエテイなどという単なる現象面の問題よりも、むしろ本質的に、その文化の諸現象を単系に捉えようとする観点そのものにこそ問題がある。そこで、次の文化圏説に眼を転ずる必要があるが、紙面の都合で次号にゆずらねばならない。（ 未完 ）

（ 千葉市加曽利貝塚博物館・学芸員 ）

〔 脚註 〕

(1) マルサス著 神永文三訳『人口論』世界大思想全集18 東京（ 昭２ ）

(2) ダーウィン著 八杉 竜一訳『種の起原』 東京（ 昭33 ）

(3) マルクス 著 武田隆夫他訳『経済学批判』 東京（ 昭31 ）

(4) タイラー 著 比屋根安定訳『原始文化』 東京（ 昭37 ）

(5) モルガン著 青山道夫訳『古代社会』 東京（ 昭33 ）

(6) Childe, V. Gorden; "Social Evolution". 1950, London.

(7) フレーザー著 永橋卓介 訳『金枝篇』 東京（ 昭26 ）

(8) 「アメリカの民俗誌学Ethnography においては、ゲンスgens（ 氏族 ）の語の普遍性が認められなかったがために、その代りに同義語としてトライブtribe（ 部族 ）およびクランclan （ 氏族 ）が用いられていた」という。

(9) マルクス著 手島正毅訳『資本主義的生産に先行する諸形態』 東京（ 昭38 ）

(10) エンゲルス著 戸塚四郎 訳『家族・私有財産・国家の起源』 東京（ 昭40 ）

(11) 羽仁五郎「唯物史観と発展段階の理論」『展望』昭和22年11月号に石田英一郎が引用。

(12) 江上波夫「古代社会」『現代のエスプリ』12号 東京（ 昭40 ）

(13) テルとは「人工の塚で、同じ場所に何度となく継続して建て直された集落の堆積物からなるもの」という説明が加えられている。

(14) 石母田正「古代史概説」『岩波講座日本歴史』1. 東京（ 昭37 ）